

# カントの空間論に於ける不一致対称物 ( inkongruentes Gegenstück ) について

## — カントの空間論の一考察 —

松 田 京 三

はじめに

カントは空間に関する自らの説の論証の中でそのひとつの論拠として不一致対称物を取上げている。しかしこの不一致対称物へのカントの言及の仕方は明瞭とは言えず、その理解に於て困難が存する。更に、また、この不一致対称物がその間に転換がある『批判』以前と『批判』以降との両期に亘って見出されることから次の問題が生ずる。即ち(カントの空間論の変遷から観た場合)不一致対称物はどのような意味や性格を持つのか、という問題。そして(同じ不一致対称物が用いられているという点から観た場合)彼の空間論はどのような構造を持つのか、という問題のふたつである。

小論の意図は、以上のことから、この不一致対称物の問題を取上げその論証に考察を加えることを試みる、というところにある。

### I 不一致対称物

カントは不一致対称物を次の4著作の中に於て取上げている。即ち、*Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegend*, 1768 (以下『方位論』と略す)、*De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis*, 1770 (以下『就職論文』と略す)、*Prolegomena zu einer jeden künftigen Metaphysik, die als Wissenschaft wird auftreten können*, 1783 (以下『プロレゴメナ』と略す)、*Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*, 1786 (以下 *M. A. d. N.* と略す) の諸著作である。本章では、まず各著作内に於て不一致対称物がどのような意味や役割を担っているのかを明らか

にするために、この不一致対称物が各著作に於て占めている位置を確定することにする。そしてその作業の中で生じた問題点は後に考察されることになるであろう。

## 1 不一致対称物とは何か

ところで上述の作業に際して、不一致対称物とは何かをまず明らかにしておくことが必要であろう。カントは『方位論』の中でこの不一致対称物を次のように定義している。「他方の物体と同一の境界で囲まれ得ないとしてもその他方の物体と全く同等で類似している *völlig gleich und ähnlich* ような一方の物体をその不一致対称物と私は称する」(Ⅱ 382<sup>(1)</sup>)。ところでこの *gleich* や *ähnlich* はどのような意味であるのだろうか。カントは次のように言う。*gleich* とは「延長の量 *Größe der Ausdehnung*」に於てであり、*ähnlich* とは「形 *Figur*」に於てである、と (ibid.)。そしてこのような不一致対称物の例としては、右手と左手、ねじ山と雌ねじ、実像と鏡像、球面三角形等々が挙げられる。

## 2 『方位論』に於ける不一致対称物

『方位論』は極めて短い論文(全文で10段落)ではあるが、文脈が錯綜しており、この中で不一致対称物の果している役割を明らかにするためには一定の作業が必要である。そこで、次にこの論文の意図、構成、不一致対称物の果す役割に従って考察を進めることにする。

この論文はライプニッツの空間論(ここで触れられているのは彼の *analysis situs*)に反対するものであり、その意図をカントは次のように言う。「私の目的は、絶対空間<sup>(2)</sup>が一切の質料の現存在から独立に、そしてそれ自身それらの質料の構成の可能性の第1の根拠として、自己の実在性を持つということの明白な証明を、幾何学が含んでいるところの延長について直観する諸判断に於て見出せるか否かを試みることである」(Ⅱ 378)、と。

論文の構成に関しては検討を加えると次のことが判る。即ち、絶対空間の実在性のための論証は第2段落から第8段落までであり、第9段落が結論となっている。そして論証の部分はふたつに区分され(前半は第2～第4段落、後半は第5～第8段落)、前半と後半との間にひとつの転回があると考えられる。そしてこの転回が論証の理解を困難にしている。しかし注意して観るならば前半と後半のそれぞれの論証は密接に連関していることが判る。以下この論証の前半と後半との間の転回と連関とについて考察することにする。

論証の前半では方位(上下、左右、前後)が我々の身体に関係させられて捉えられている。

しかし論証の後半では身体との関係で方位が語られることはなく（左右の手の例が出ては来るが、これは他の不一致対称物と同じ資格で出て来るに過ぎない）、身体に代って絶対空間に方位が関係づけられるのである。この両者の転回と連関に関しては次のように捉えることができるであろう。即ち、前半は身体に目を向けることによって方位が何らかのものに関係づけられねばならないことを論証しようとしたのであり（この点での方位はまだ相対的なものである）、後半ではその何らかのものが究極的には実は絶対空間であることを論証しようとしたのである、と。即ち、前半は後半のための予備的論証である。論証全体をこのような二段階の論証であると捉えることによって整合的に理解することができよう。

以上のような論証の後にカントは結論として次のように言う。1) 空間の諸規定が質料の部分相互の位置 Lage<sup>(3)</sup> の帰結ではなく、質料の部分相互の位置が空間の諸規定の帰結である。2) 物体の性状に於て区別が見出され得、更に絶対的で根源的な空間にのみ関係する真の区別が見出され得る。何故ならば絶対的で根源的な空間によってのみ立体の関係が可能であるからである。3) 絶対空間は外的感覚の対象ではなく、外的感覚を初めて可能ならしめる根本概念であるから、我々は物体の形象に於て全く純粹空間に関係するものを他の物体との比較によってのみ理解し得るのである。

さて以上のことを踏まえた上で次に問題の不一致対称物の位置や役割を考察することにする。不一致対称物が持ち出されるのは論証の後半部分に於てである。先に観たようにこの箇所は絶対空間の実在性のための論証の箇所である。Kantは不一致対称物を定義し説明した後にこれを「哲学的適用」(Ⅱ 382)へともたらしめて次のように言う。即ち、不一致対称物の不一致性は物の諸部分の結合の仕方にあるのではない。何故ならば、物とその不一致対称物とに於ては、諸部分の結合の仕方（諸部分相互へ距離の関係）は全く同じであるからである。従ってこの不一致性（「内的区別」(Ⅱ 382)）は諸部分の結合の仕方とは違った「内的根拠」(ibid.)に基づかねばならない、と。

ところでこの「内的根拠」がただちに絶対空間であると主張し難いかも知れない。そこで第8段落で最初の創造物が人の手であるとする思考実験が行われる。この思考実験は難解であるが、次のようにまとめて換言し得るであろう。即ち、身体に関係させられる限りでは左右は相対的である（例えば或る人の左は他の人の右であり得る）が、不一致対称物の不一致性はそれと事情を異にしており絶対的であり（どのようにしても一致させることができない）、従ってその不一致性が基づくべきものは絶対空間でなければならない、と。

以上のことからこの『方位論』に於ける不一致対称物の役割が明らかになった。即ち、論証の前半に於て身体に目を向けることによって明らかになった、方位が関係づけられるべき或る

ものを、論証の後半に於て絶対空間へともたすことが、この不一致対称物の役割であったのである。

### 3 『就職論文』に於ける不一致対称物

この『就職論文』は『純粹理性批判』の原型とも見做され得るものであり、空間に関する論述もほぼ超越論的感性論と同様である。この『就職論文』に於ては不一致対称物は§15 Cで言及され、空間が純粹直観であるための論拠となっている。

「与えられた空間に於て……反対の方向に広がっているものは精神の如何なる鋭さによっても論証的に記述し得ないし、或いは悟性的徴標に還元することはできない。従つて完全に相似であり同等であるが不一致な立体<sup>(4)</sup>……相互に反対の半球上にある球面三角形に於て、仮令、精神に理解できる徴標を論証的に記述し得る一切の契機によつては相互に置換され得るにしても、延長の限界が一致することがそれによつて不可能となる差異が存するゆゑに、ここで、或る純粹直観によつてのみ、差異性即ち不一致が明示され得ることが明らかである。」(Ⅱ 403)

この超越論的立場に踏み出した『就職論文』に於ては不一致対称物は先の『方位論』とは異なつた役割を担い、絶対空間のためにではなく、空間が純粹直観であることを示すために持ち出されるのである。しかしここでは十分な説明を伴つて不一致対称物に言及されている訳ではないために、不一致対称物が一体如何にして空間が純粹直観であるための論拠となり得るのかを理解することは容易ではない。それを明らかにする鍵は「論証的に discursive」にあると思われ、この「論証的」を充分に理解することによつてこの『就職論文』に於ける不一致対称物の役割を充分に明らかにすることができると思われる。しかしここでは、カントがこれ以上説明していないので、この「論証的」を不一致対称物と関わらせて明らかにすることはできない。この節では単にそれを課題として挙げるにとどめ、後の考察に付さざるを得ない。

### 4 『プロレゴメナ』に於ける不一致対称物

この『プロレゴメナ』は『純粹理性批判』の後に著されたものであり、既に超越論的觀念論の枠内にあることは言うまでもない。そのような『プロレゴメナ』の中で、消極的な形ではあるにしても、不一致対称物が空間についてのカントの考えを正当化する論拠として取りあげられている。§13でカントは、それまで述べて来たカントの考えに反対する人々に対して、不一致対称物のパラドクスで訓練してみてもその解決が徒勞であるならば、次のように推測できるで

あろうとしている。即ち、「恐らく、空間や時間を我々の感性的直観の単なる諸形式に低めることは根拠を持つであろう」(Ⅳ 285), と。

それではこのパラドクスとは一体どのようなものであろうか。カントはここでも、『就職論文』に於けると同様に、球面三角形を不一致対称物として取りあげる。そしてこの球面三角形の性質について次のように言う。即ち、このふたつの球面三角形は、その両者は各辺の長さや角の大きさに関しては完全に同じであり、その一方のみが完全に描かれるならば、他方を描く際には存しないような何かが先の一方に於て見出されることはない。しかしそれでも尚、一方と他方との球面三角形を置き換えることはできない。ここに「如何なる悟性も述べることができない、両三角形の内的不一致があり、この不一致は空間に於ける外的関係によってのみ現われる」(Ⅳ 286)。また、物とその不一致対称物との間には「何か或る悟性がただ思惟することができるような如何なる内的区別もない。しかしそれにも拘らず、感官が教える限りでは、その区別は内的である。何故ならば左手は右手と共に、双方のすべての相等性と類似性とに拘らず、同じ限界内に囲ませられ得ないからである」(ibid.)。

以上のことから明らかなように、パラドクスというのはここでは、物とその不一致対称物とが、悟性に対しては全く同じであり、感官に対しては異なっている、ということである。そしてカントはこのパラドクスの解決は?と問うて次のように答える。1) 右手や左手というような対象は「純粹悟性 der pure Verstand<sup>(5)</sup>」が認識するようなものではなく、「感性的諸直観、即ち、その可能性が或るそれ自身では知られざる物の他のものへの関係、即ち我々の感性に基づくところの諸現象である」(ibid.)。2) 「ところで現象に関して、空間は外的直観の形式であり、各々の空間の内的規定は空間全体への外的関係の規定によってのみ可能であり、この空間全体については各々の空間は部分である(外官への関係に対して)。即ち、部分は全体によってのみ可能である。このことは、単なる悟性の諸対象としての諸物自体に於ては決して生じないが、しかし単なる諸現象に於ては生ずる」(ibid.)。ここでは、物とその不一致対称物との内的不一致が空間全体への関係に基づくとき、その点では『方位論』での論証と類似している。しかし、部分が全体によって可能ならしめられるという点で、超越論的観念論の立場から、空間が感性的直観に含められ従ってまた現象へと数え入れられるのであり、『方位論』に於けるような実在性は退けられるのである。3) 物とその不一致対称物との区別(「内的不一致」)は、概念によっては説明され得ず、「直接直観に於て生ずる右手と左手との関係によってのみ、説明し得る」(ibid.)。この概念によっては説明されないということは、論証的 diskursiv には説明されないということであり、その点で、先の『就職論文』の箇所と同様である。

以上のことからこの『プロレゴメナ』に於ける不一致対称物の役割が明らかになるであろう。即ち、ここでは空間が直観或いはまた直観の形式であり、従って現象に属するものであること、を認めることのための訓練のパラドクスとして、この不一致対称物を取りあげられた、と。

## 5 *M. A. d. N.*に於ける不一致対称物

*M. A. d. N.*は『純粹理性批判』を予備学としてそれに基づいて生じたところの形而上学の一部を成すものであることは、その構成といった点から見ても、明らかである。この *M. A. d. N.*に於ては、不一致対象物は運動学の第2の定理（「物の運動は、その物の所与の空間に対する外的関係の変化である。」）の第3の註解に於て取りあげられている。この箇所は運動の方向を取りあげ、その向きを論じている。

この向きに関しては、例えば隠元豆とホップとのつるの相違があるが、このような相違は「真の、数学的な、更には内的な区別であり」（Ⅱ 484）、それは「確かに構成されるが、しかし、概念としてはそれ自身普遍的な徴標によっても、また論証的な認識の仕方にも決して明瞭ならしめられ得ない」（*ibid.*）ものである。またこの相違は、確かに直観に於て与えられ得るが、明瞭な概念にはもたらされ得ず、従って悟性的には説明され得ない、とも述べられ、“*dari, non intelligi*”と性格付けられる。このことから次のように結論付けられる。「空間一般は、必然的に客観的諸概念にもたらされ得なければならないような諸物自体の諸性質や諸関係に属するのではなく、諸物或いは諸関係についての我々の感性的直観の主観的形式に属するのである」（*ibid.*）。

ここでは、運動の方向という点で不一致対称物に言及されているのであり、先の運動学の第2の定理に於ては、それほど重要な位置を占めている訳ではない。また、この不一致対称物によって引き出された結論は先の『プロレゴメナ』で引き出された結論の中に含まれるものである。従って以上のことから、この *M. A. d. N.*に於ける不一致対称物の役割は、更に新たに付け加わるものがなく、『プロレゴメナ』に於けるそれと同じであると言うことができよう。

## Ⅱ 不一致対称物に関する問題

前章に於ては各々の著作に於ける不一致対称物の位置付けを、問題点や立入った議論を残しながら、概括的に行った。本章に於てはその残された問題点に立入った考察を加えることにす

る。

## 1 「内的相違」・「内的根拠」の「内的」について

カントは相互に不一致対称物の関係にある物同士の間に見出される不一致性を「内的相違」(“inner Unterschied” — 『方位論』・ *M. A. d. N.*, “innere Verschiedenheit” — 『プロレゴメナ』)と呼び、それを「真の相違」(『方位論』・ *M. A. d. N.*)としている。しかしカントはそのように述べる際に「内的」ということに十分な説明を加えることをしていない。更には『プロレゴメナ』に於ては一見するとこの「内的」に関して混乱したような言回しがみられる。不一致対称物に関してこの「内的」という概念は重要な意味を持つと考えられるので以下に考察することにする。

各々の論文に於ける不一致対称物の位置付けを勘案するならばこの「内的」に関して次のように考えることができよう。『方位論』に於て示されるように物とその不一致対称物との間に見出される不一致性は、仮令両者の比較によって意識されるにせよ、両者の比較によって生ずるのではない。その不一致性は一方だけの規定として存し得るのであり、そのためにその不一致性がそれへと関係づけられる空間が要請されるのである。従って「内的相違」の「内的」は、他との比較に於てではなくそれ自身で(勿論物自体の意味ではない)ということと、ここに於ては同じことだが、対象の成立のための条件としての空間への関係とを意味しているのである。そうであるからこそ空間は「内的相違」の「内的根拠」(『方位論』)と称されるのである。そしてまたそうであるからこそ、「内的相違」は比較に基づく相対的なものではなく絶対的なものであり、従って「真の相違」と称されるのである。不一致対称物の空間へのこのような関係は、仮令その空間が絶対空間とされようと或いは純粹直観とされようと、4著作に共通するものであると言えよう。

## 2 「論証的 diskursiv」について

カントは空間が直観であることを示すために、不一致対称物に関して、先の「内的相違」は「論証的」には理解できない、と繰返している(『就職論文』・ *M. A. d. N.* 『プロレゴメナ』では悟性は理解できないとしている)。この「論証的」という規定は悟性或いは概念の規定である。ここでもカントはこの「論証的」ということに十分な説明を加えているとは言い難い。それでは一体この「論証的」はどのように理解されるべきであろうか。

「論証的」或いは悟性或概念は様々な点から観ることができるが（例えば自発性等々），ここでは全体と部分との関係に於て観られるべきである。<sup>(6)</sup> 概念に於ては全体と部分との関係は上位概念と下位概念との関係であり，従って部分が全体を可能にする。ところが直観に於ては全体と部分との関係はそれと対照的であり，全体は部分を“in sich”（*K. d. r. V.* B40）に含むものであり，従って全体が部分を可能にするのである。

ところで先の不一致対称物の「内的相違」は、『方位論』で分析されたように，全体としての（絶対）空間によって初めて可能であった。従ってこの「内的相違」は全体と部分との観点からすれば「論証的」には理解することはできず，むしろ直観の対象としてのみ捉えられるのである。

『方位論』に於ては空間はまだ純粹直観や直観の形式という規定は与えられていない。しかし，この全体と部分との関係という点から観るならば既に『方位論』に於てその萌芽がみられると言って良いだろう。

### Ⅲ 不一致対称物と空間論

『批判』以前と『批判』以降との間に転換があるにも拘らず不一致対称物は両期に亘って見出される。本章ではこの点に目を向けて，不一致対称物とカントの空間論との関係を，これまでの考察に基づき，概括的に考察することにする。

#### 1 不一致対称物の役割

これまで考察して来たことに基づくならば，不一致対称物について次のように言うことができるであろう。即ち，その最も基本的な役割は，部分（「内的相違」）が全体（空間）によって初めて可能となる，ということを示すところにある，と。そしてこのことは，仮令そこから更に様々な表現が引出されようとも，4著作に共通にみられるものである。

確かにこの不一致対称物による議論から絶対空間や純粹直観や直観の形式等々の一見別様な結論が導かれることから，4著作に於て不一致対称物は別様な役割を担っていると考えることができるかも知れない。<sup>(7)</sup> しかし不一致対称物の最も基本的な役割が4著作に於て共通であるばかりでなく，一見すると別様な結論も後に触れるようにそれほど相互に異なったものでもないのである。



## 2 カントの空間論変遷の構造

カントは空間についての議論を小論で取上げた4著作に於てのみ行った訳ではない。しかし小論では不一致対称物に焦点を当てているのでここではそれが関る限りでの空間論の変遷に目を向けることにする。

カントの空間論の変遷に関しては、『方位論』(1768)と『就職論文』(1770)以降との間に大きな転回があり、それを媒介するのが1769年の所謂“großes Licht”である、とされるようである。<sup>(8)</sup>しかし不一致対称物に即しながらこの空間論の変遷を観るならば両期(少くとも空間論に関しては『就職論文』は『批半』以降に属させることが可能であろう)の間にはそれほど大きな転換はみられないと考えられる。何故ならば『方位論』に於て既に空間が対象成立のための制約(「内的根拠」として捉えられているばかりでなく、全体が部分を可能にするという点からして、明言はしていないにせよ、空間の直観的性格をも捉えているからである。

従ってそのような点からすれば『方位論』で論証されている「絶対空間」は必ずしもニュートンの絶対空間であるとは言えないとすることができるかも知れない。

以上のことに基づくならばカントの空間論の変遷に関して次のように結論することができるであろう。即ち、『方位論』に於ては主に存在論的側面から空間が考察されたのであり、そこで得られた結論を含みながら『就職論文』以降では更に認識批判が加わったのであり、両期の間には転回というよりはむしろ連続・発展がみられるのである、と。

おわりに

不一致対称物によるカントの議論は一定の説得力を持つと共に疑問の残るところもある。事実カントの論証への反論も何編か見出される。しかし小論に於てはカントの議論の是非の検討にまで立入ることをしなかった。その理由はそのためには全体と部分との関係の詳細な考察が先行すると考えられたためである。この全体と部分との関係の問題は空間に関するならば無限の問題とも重なるであろう。そこでこの空間に関する無限の問題を次の考察の課題として挙げることによって小論のしめくくりとすることにする。

〔研修員〕

## 註

- (1) 引用の頁付けはアカデミー版に基づき、ローマ数字は巻数、アラビア数字は頁数を示す。
- (2) ただしここで言う絶対空間はニュートンのそれかどうかは判然とせず、異なった見解が存在する。例えばスミスやアディクスはニュートンの絶対空間であると解し、ランゲはそうではないとしている。N. K. Smith, *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason,"* 1923, P.163. E. Adickes, *Kant als Naturforscher*, Bd.1, 1924, S.235. H. Lange, *Über den Unterschied der Gegenden im Raume*, Kant-Studien, Bd.50, 1958-59, S.480 ff. しかし本章に於てはこのことに直接は触れないことにする。何故ならば本章に於て取扱われる問題は空間の質料に対する独立性であり、その点では両者の見解には相違がないと考えられるからである。
- (3) ここに於ける「位置」の概念は不一致対称物の考察にとって重要なものであるが、それにも拘らずカントは明瞭に述べることをしていない。しかし考察を加えるならばこの「位置」の概念は部分間の距離の概念であることが判るであろう。
- (4) 原文ではこの箇所は *solidium* となっているが、文章に照らしてみても、K. Reich の訳 “dreidimensionales Gebild” を採ることにする。
- (5) ファイヒンガーは、“wie Dinge der pure Verstand erkennen würde” という表現は古風な前提であり、そのためにパラドクスが『純粹理性批判』で取り上げられなかったのだろう、と指摘する。H. Vaihinger, *Commentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Vol. II, 1892, S.522. 更には、『プロレゴメナ』のこのような立場はカントの批判主義と矛盾しており、“Dogmatismus” への後戻りであるとさえ、ファイヒンガーは言っている。a. a. O. S.528.  
しかしこの表現は単に右手や左手が物自体ではなく現象であることを言うためのものであり、ファイヒンガーが指摘するような後戻りという程強く取る必要はないのではないかと考える。
- (6) この全体と部分との関係に目を向けることを小論ではブローカーによって気付かされた。J. V. Buroker, *Space and Incongruence*, 1981, P.72 f.
- (7) Cf. N. K. Smith, *op. cit.*, P.164.
- (8) Cf. N. K. Smith, *op. cit.*, P.163. E. Adickes, *a. a. O.* S.239.

# Über das inkongruente Gegenstück in Kants Raumtheorie

## — Eine Betrachtung über Kants Raumtheorie —

Kyozo Matsuda

Die Absicht der vorliegenden Abhandlung ist der Versuch, das Problem des inkongruenten Gegenstück in Kants Raumtheorie als des Beweises seiner Ansicht herauszunehmen, und darüber Betrachtungen anzustellen.

Die Bestimmung der "transzendentalen Idealität" hat Kant dem Raum in kritischen Periode gegeben. Dagegen hatte er dem absoluten Raum die Bestimmung der "Realität" in der vorkritischen Periode. Nun finden wir "inkongruentes Gegenstück" in vier Werke, nämlich *Von dem ersten Grunde des Unterschiedes der Gegenden im Raume*(1768), *Dissertation*(1770), *Prolegomena*(1783), *Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft*(1786). Das zeigt, daß es in Ansehung der Raumtheorie zwischen der vorkritischen Periode und der kritischen vermittelt. Daraus entsteht das Problem, warum Kant das indongruente Gegenstück einerseits für den Beweis der "Realität" des absoluten Raums(1768) und anderseits für den der "Idealität" des Raums(1770, 1783, 1786) benutzt hat. Das Problem wird noch in zwei Probleme abgeteilt, d.i. was für eine Bedeutung das inkongruente Gegenstück hat (in Beziehung auf den Wechsel in Kants Raumtheorie), und was für eine Struktur der Wechsel seiner Raumtheorie hat (in Beziehung auf die Benutzung desselben inkongruenten Gegenstück).

Durch die Betrachtung dieser Probleme können wir in dem Wechsel seiner Raumtheorie eher eine Kontinuität als eine Wendung finden.